海驢

〔釋日本紀八述義〕海驢皮

大問云、此何物哉、先師申云、驢者海馬也、

〔古事記上〕豐玉毘賣命（中略）白其父曰、吾門有麗人（彦火々出見命）爾海神自出見云、此人者天津日高之御子虛空津日高矣、卽於內率入、而美智皮之疊敷八重、亦絁疊八重敷其上、坐其上、而具百取机代物爲御饗、

〔古事記傳十七〕美智皮、書紀に海驢と作て、此云美知とあり、釋に海馬也と注し、（海馬は漢名なり、本草に、陳藏器曰、海驢海馬等皮毛在陸地、皆候風潮則毛起）口決には、海驢之皮在陸、而潮滿則自起毛とのみ云て、其物のさまは云ず、建長八年百首に、衣笠內大臣、我戀は海驢の寐流れ寤やらぬ夢なりながら絕やはてなむ（夫木集に出ツ）紀國人の云く、今紀の海に阿志加と云物あり、其處にて昔より字には海馬と書來れるよし、日高郡の海中に阿志加島と云島のあるに、年毎の秋冬のころ多く來て岩上に睡り、又波上に浮びながらも熟睡て、凡て寤ることの遲き物なり、大きなるは長さ一丈許なるもあり、足は無くて水搔の如くなる物あり、此物西國の海にもあるなり、和名抄に葦鹿と云物を載て、本文未詳と云るせり、思ふに是海驢なるべしと云り、（或人は、阿志加は本草綱目に海獺とある物なりと云り、）或書には、山東志曰、海驢出文登海中、狀如驢、常於秋月登島產乳、其皮製爲雨具、水不能潤、今按に海中に登騰と云物あり、岩屋の內に上り、よく睡る物なり、皮は馬具に用ふ、其首馬に似て、大さは小馬ばかりなり、これ海驢なるべし、陸奥松前蝦夷、又國々の海邊にも稀にあるなりと云り、（本草綱目に、東海島中出海驢、能入水不濡、）又或人の云く、今も北海に海驢あり、其皮潮滿れば柔に、潮干れば枯る、今も敷皮にするなりと云り、右の說どもの內、何れか正しく美智に當るべき、かの紀國人の云る阿志加と、或書に云る登騰とは、一ッ物の地によりて名の異なるか、はた別物か、なほよく尋ぬべし、相遠からぬ物とは聞えたり、又近き年西國の海にて捕れりとて、水豹と云物を觀せ物にしたる、長さ三尺許ありて、阿志加のたぐひなる物と見えたり、こは已正しく見たる物なる故に云なり、水豹と云名は新にみだりに著たるなるべければ、依るに足らざることなり、今世にも美智と云名の遺れる地